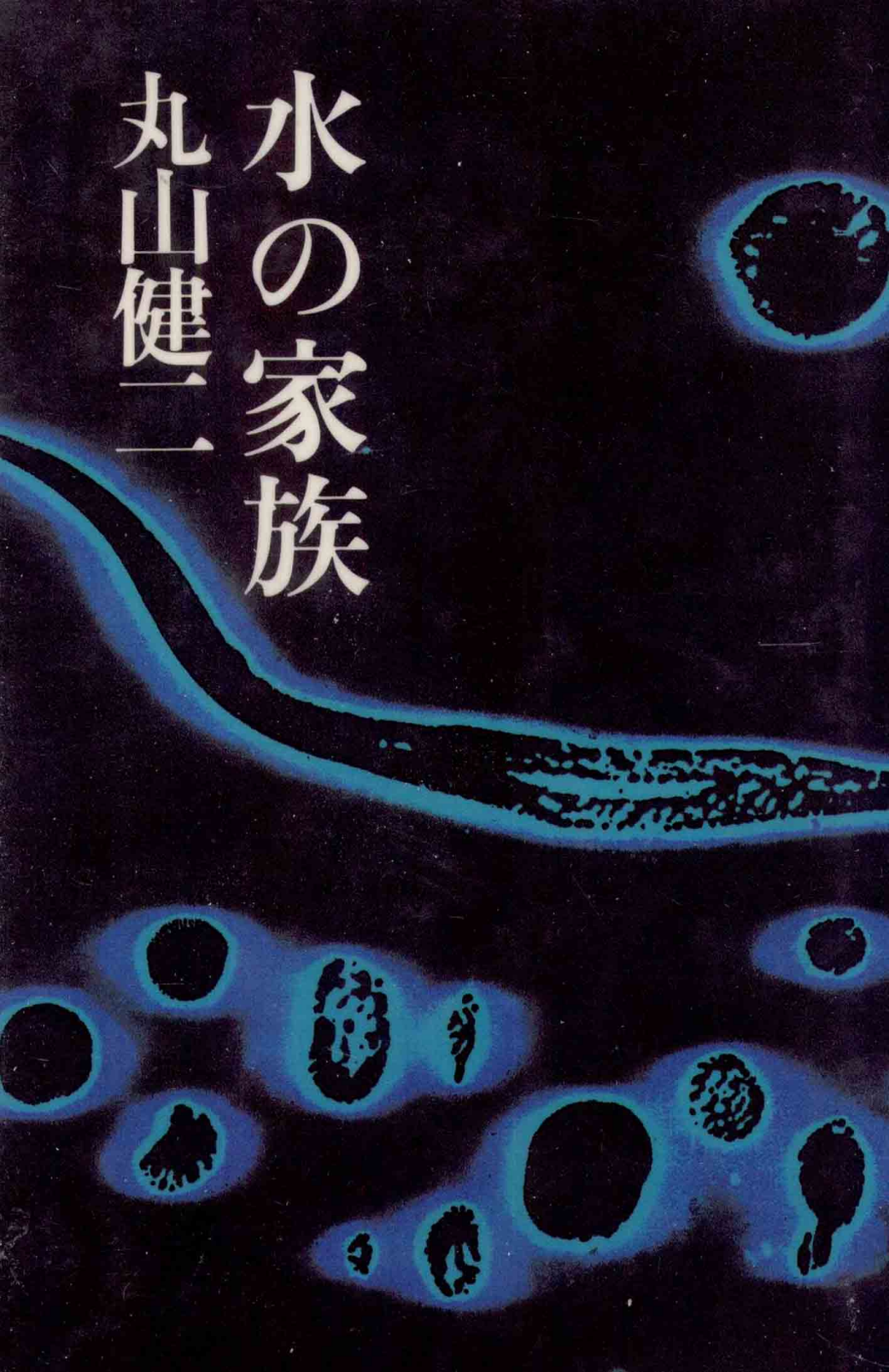
水の家族

丸山健二



水の家族

丸山健二

文藝春秋

著者紹介

一九四三年長野に生まれる。仙台電波高校卒業。一九六六年「夏の流れ」で第二十三回文學界新人賞を受賞、同作品で第五十六回芥川賞を受ける。芥川賞史上最年少の受賞作家である。現在、北アルプスの山麓長野県大町市に住む。妥協を許さない、孤高の生活から生まれた作品群は、現代日本文学の新生面をひらき、文芸界で最も刺激に富む作家である。

水の家族

一九八九年一月三十日　第一刷

定価　一二〇〇円

著者　丸山健二

発行者　豊田健次

発行所　株式会社・文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話代表(〇三)二六五―一二一一

印刷所　大日本印刷

製本所　加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©Maruyama Kenji 1989 Printed in Japan ISBN4-16-310750-9

水の家族

装画　斎藤寿一

・シリーズ「青い光」より

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

☆

ただならぬ水の気配がする

花冷えがするこんな夜更けに、何者かが川を泳いで渡ろうとしている。張り詰めたその気配は、対岸にある三連の大水車が休まずに立てる水音をかいくぐりながら、確実にこっちへ近づいている。私は息を殺してそっとペンを置き、尚も心耳を澄ます。どうやらけものの類いではなさそうだ。

人間だ。直接見たわけでもないのに、人に間違いないという確信が、私をぐさりと貫く。

八重子ではないか。

激しく押し流されながらも、疲れを知らない見事な抜き手を切って、幅一キロの忘れじ川をぐいぐいと横切る八重子の姿が、はっきりと眼に浮かぶ。不思議なことがあればあるものだ。夜と同じくらい深い竹林のなかにある荒れ果てた庵、雨戸もガラス戸もぴったりと閉ざされたこの一室にいながらにして、外の光景を隅から隅まで手に取るようにわかるのはなぜだろうか。

それは、思春期の頃に夜毎見たあの白い夢よりも、大熱を出したときに取り憑かれたあの黒い幻よりも、はるかに生々しく、川を泳ぎ渡る者の胸のうちまではっきりと読めてしまう。二十九年と十一ヵ月と二十数日のあいだ生きてきた私だが、こんな経験は初めてだ。

八重子は私に逢いたがっている

とうとう私の居所を突きとめた彼女は今、五年という歳月の恐ろしい隔たりを一気に縮めるべく、健気に水と闘っている。八重子という女はまだ、私という男がまず何よりも欲しがるものを忘れてはいない。だから、素っ裸だ。

川面を次々に突き破る力強くて嫋やかな腕も、清流の水草のように滑らかになびく長い髪も、

ほんの少し血の巡りがわるい頭であることなど赤の他人には決して想像させない広くて美しい額も、水をひと掻きするたびに丸見えになる形のいい乳房も、すべて青々と月の光に染まっている。あれからすでに春は五回も繰り返されたというのに、八重子の若さにはますます磨きが掛かっている。

私はすっかり老けこんでしまっている。

これがあと数日のうちに三十歳の誕生日を迎えようという男なのだろうか。家を飛び出した途端に、風切り橋を渡って草葉町（くさばちょう）を離れると同時に、私の時間は突然速く流れ出したのだ。このろくでもない五年のあいだに、ひょっとすると私ひとりがいっぺんに五十年をくぐり抜けたのかもしれない。これほどまでに窶れ果てた姿を、少なくとも八重子の前だけには晒したくない。

私は郷里の誰からも失望されたくない

また、誰からも同情を寄せられたくないし、誰からも蔑まれたくない。近しい人々との再会や元通りの暮らし、私が求めているのはそんなことではないのだ。今の私に必要なのは独居と養生と静寂、それに忘れじ川の彼岸から風がときおり運んでくる草葉町の生新な白い霧であって、ほ

かの何者でもない。八重子はむろん、八重子の面影さえも欲しくはない。

しかし、八重子はぐんぐん迫ってくる。

餓鬼岳の雪融け水をものともしない彼女の情熱を支えているのは、まだ草葉町の住人だった頃の、まだ草葉町の水しか知らなかった頃の私に違いない。人を人とも思わぬ、あの途轍もない大都市は、四年と半年で私をぼろぼろにし、まるで歯くそか痰のように私を吐き出した。

そして私は、ジステンパーに冒された野犬のように、あるいはけちな盗っ人のように、こんなところにひっそりと身を潜めている。草葉町へは一歩も足を踏み入れていないばかりか、風切り橋へ近づくことさえも極力避けている。川原で拾った自転車に乗って隣り町——ここの竹林もその一部なのだが——へ買物や入浴や洗濯に出かけるのもたいてい日が落ちてからだし、それも帽子を目深にかぶって行く。よしんば家族や濃い親戚の者やかつての友人と街角でばったりと出くわし、まともに視線を合せたとしても、先方はまず私に気づかないだろう。頬の肉がげっそりと落ちているうえに、顔の半分が無精髭で埋まってしまっているのだから。

水面に映った私を、私自身がたしかに私だと認められるようになるまでには、この先まだまだ長い時間を要するに違いない。

それでも私は少しずつ回復に向っている

少なくとも、昼夜を分かたず人の命と魂を貪り食ってぶくぶく太ってゆく、あの言語道断な街の片隅で臥せっていたときよりは、少なくとも、去年の秋の終りにふらふらになってここへ辿り着いた頃よりは、ずっと体調がいい。いちいち医者に診てもらわなくても、自分の体のことは自分が一番よく知っている。私に必要なのは、強力な抗生物質でもなければ、滋養分に富む食べ物でもなく、また、家族の手厚い看護でもない。

私に欠かせないのは、草葉町の水だ。

拗けた形のこの半島一帯に降る雨と雪、餓鬼岳が山腹のいたるところで吐き出している湧水、もっと遠くの山々から忘れじ川が運んでくる真水、それを一手に引き受ける天の灘の海水、そうしたさまざまな水が昼も夜も放ちつづける、肉眼でも計器でも捉えられないエネルギーが、衰弱し切った私に活力を与え、失った血と肉と誇りをとり戻させてくれているのだ。苛立たしい微熱は依然つづいているが、しかし、もっと春が深まって気温と水温があがれば、自然に平熱までさがるだろう。そして夏になれば完治し、秋の初めには忘れじ川を泳いで渡れるほどの体力が甦っていることだろう。その暁にはおもちゃの花火でも打ちあげて祝い、ここを引き払ってどこか遠くの知らない土地へ流れて行き、私の手に負えそうな小さな町で、これまでの一切合財を忘れて

新規にやり直すつもりでいる。

だから、たとえ相手が誰であろうと逢いたくない。よしんば逢ったところで、今の私には八重子を抱いてやる力などどこにもありはしない。それに私は、あの種の波風を二度と立てたくないのだ。

八重子はもう私にかかずらうべきではない

八重子はそういつまでも私のような男を追い掛けるべきではない。私の影さえも求めてはならない。未だに持ち主がわからない檜皮葺きの庵、おそらく今では私と八重子のふたりしか存在を知らないこの廃屋は、五年のあいだに更に朽ちて、もはや逢瀬にふさわしい建物とはいえなくなってしまっている。家鳴りの激しい、すでに半分の部屋しか使えないあばら家の耐久力は、私ひとりがあと数ヵ月暮らせる程度しか残っていないだろう。

私はここで規則正しい毎日を送り、栄養と休養を充分にとって体の病を治し、思いつくままに草葉町の水のことを青いノートに書き連ねて心の病を癒さなくてはならない。そんなところへ八重子に押し掛けられでもしたら、何もかもが振り出しに戻り、一体何のために草葉町を去ったのかまったく意味をなさなくなってしまう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

泳ぐ者の気配が一層濃くなってきている。

早くも本流を横切った八重子は、あとひと息で孟宗竹に覆われたこっちの岸へ辿り着こうとしている。彼女の膝はまもなく川底の粒の粗い砂をこするだろう。当時私たちふたりの膝や肘がのべつ擦剝けていたのは、なにも石英分に富んだ川砂のせいばかりではなかった。あばら家のささくれた床板、忍冬の根が野放図に張っている硬くてごつごつした地面、葦原のなかの古い桟橋、夏のあいだ中クルマも人も通らないアスファルトの道……あの頃私たちはところ構わず抱き合い、上になったり下になったりして、互いに体を強くこすりつけ合ったものだった。

八重子は今も尚潑剌としている

以前と少しも変らぬ精気をいっぱい漲らせた彼女の肢体は、きっと周辺の水温を一度か二度あげているに違いない。微熱と氷のように冷たい汗に連日責められて命をいくらか削られた私のか細い体では、もはや膝に血が滲むほどの勢いで八重子にのしかかってゆくことなど到底できはしない。

何がどうあっても、八重子との再会だけは絶対に避けなくてはならない。私はこういうときに備えてあらかじめ決めておいた手順に従って動く。文机、寝具、炊事道具、石油ストーブ、そう

いった全財産を素早く押し入れに隠し、二度と戻れなくなるような事態を考えて、青いノートと財布を持って出る。財布には四年半のあいだ死に身になって働いてためた金が入っている。

それはためるつもりでためた金ではない。

草葉町や八重子のことを忘れようとして、生きていることさえ忘れようとして、くる日もくる日も、ほとんど休みを取らないで穴掘りの仕事をつづけた結果たまった金だ。重い橋を支えるための大きな穴、機械では絶対に掘れない狭くて深い穴、私が遮二無二挑んだ不潔で危険な穴、その穴は掘っても掘っても私を埋めてくれなかった。

一日の仕事を終えて穴から這いあがった私を待っていたものは、都市がのべつ放っている喧騒と悪臭、限界を超えている疲労とわけのわからない怒りや悲しみ、そして、多いとも少ないともいえる日当だった。金の遣い途についてはすでに決めてある。大半は私の健康回復のためにあて、出直すための資金にし、それでも余ったらどこかの郵便局から八重子に宛てて送るつもりだ。

私の自転車は楠の巨木に立てかけてある

広い竹林のなかに一本だけ生えている立派な楠、その老木が放つ香りは、自らを虫の害から守

っているばかりではなく、あばら家の腐敗を遅らせ、且つ、私の肺に巣くっている病原菌を追い払ってくれている。しかしかつてこの木は、私と八重子を引き寄せたのだ。楠と私にぴったりと挟まれた八重子は、私の手を乳房へと誘った。

私は自転車を走らせる。

今夜に限って体がいやに軽く感じられるのは、一体どういうわけだ。気分もいつになくいい。それになぜかあたりは明るく、真冬の満月の晩よりも見通しが利き、地面を突き破ったばかりの小さな筍でも数えられるほどで、おまけに風もなく、とても静かだ。聞えるのは、天の灘の潮騒でもなければ、天の灘へ向って滔々と流れる忘れじ川の重厚な水音でもなく、また、忘れじ川の水を四六時中汲みあげる三連の大水車の、耳に心地いい、あの軋みでもない。葦原を塒にしている数々の水鳥たちは、今夜に限ってねぼけたり闇に怯えたりせず、ずっと沈黙を守っている。

私に感知できるのは、こっちの岸へまっしぐらに泳いでくる素っ裸の女の、荒々しくもなまめかしい息遣いのみだ。間違いなく八重子が近づいている。残念だが、ここを引き払わなければならない。せめてあと一冊分のノートに草葉町の水のことを書きたかった。せめて夏まではこの地にとどまって、ゆるやかな風が対岸から運んでくる忍冬の花の香りを、心ゆくまで堪能したかった。せめて立ち去る前に元気な八重子の姿をひと目でいいから見ておこう。そして、川辺の眼に

つき易いところへ財布の中身を半分置いてゆくとしよう。

私の五体はますます軽くなってきている

微熱による気怠さが失せ、併せて慢性的な疲労も消え、息切れや空咳が嘘のようにおさまり、ペダルにほとんど力を加えなくても楽々と自転車を走らせることができる。そうやって竹林を抜けると、私は自転車を放り出して、急な斜面をするするとよじ昇る。堤の上に出た途端、私の考えはがらりと一変している。

つまり、逃げも隠れもしないでおこうと意を決し、五年の歳月と一キロの幅の川を横切って逢いにきてくれる者をひしと抱き締めてやるために、私は胸を張って待ち構える。明らかに私は、草葉町に身を置いていた当時の高揚へ向って、ものすごい速さで後戻りしている。生き返った心地とはまさしくこのことだ。そして泳ぐ者はといえば、すぐそこまで、私の真下の浅瀬まで迫っている。

ところが、それは八重子ではない。

また、ほかの誰でもない。人間ではない。橋から投げ込まれた野良犬でもない。亀だ。珍しい

ことがあるものだ。そんな大型の海亀が忘れじ川をこんなところまで溯ってきたなどという話は、ついぞ聞いたためしがない。私はもっとよく見てやろうと土手を滑り降り、水際で待ち受ける。

やはり亀だ。もう疑う余地はない。亀は腹を川底にこするところまでくると泳ぐのをやめ、四肢を踏ん張って、老松の根っこに似た首をぐいともたげ、私を真っすぐに見つめる。濁ったその眼から涙がとめどもなく溢れている。

私たちは長いこと見つめ合っている

玄武岩を想わせる硬い甲羅に守られた閉鎖的な生き物、そいつはやがて頭をひと振りし、のろくさと躰の向きを変え、尾のあたりに生えている八重子の髪や水草によく似た長い毛をふさふさとなびかせて泳ぎ出し、あっという間に潜って姿を消してしまう。

私は呆然と立ち尽くしており、そいつが川面のどこかにふたたびぽっかりと浮上してくるのを待っている。しかし、亀は二度と現われない。そして、忘れじ川は過ぎゆく時と共にゆったりと流れて春の夜を深め、彼岸に横たわる草葉町は月光を余さず吸収し、不思議なことに、餓鬼岳が二重に見えている。

私は草葉町の夜景に魅了されている。

それはこれまで見たなかでは最も甘美な草葉町の遠景かもしれない。満開の花に覆われた桃の木々、桃園のあちこちに点在する農家の屋根、今は泳ぐのをやめて静かに眠っている鯉のぼり、葦辺で揺れる父の帆引き船、土手の道に新たに設置された防犯灯の針のように鋭い光、そうした月映えの光景に私はいつまでも見とれている。

そこには懐かしのわが家があり、そこにはわが家族が住んでいる。祖父、父と母、兄と兄嫁、私とは三つ違いの弟、それに五つ年下の妹の八重子が、この川の向うで、今もたしかに暮らしているのだ。

家族は私を見限ったのだろうか

私は家族と草葉町を忘れようと四苦八苦したが、しかし忘れられなかった。忘れられなかったからこそ、おめおめと舞い戻ってきてしまった。だからといって、ふたたび風切り橋を渡ってあの家へのこのこ帰って行くつもりは毛頭ない。帰ったところで歓迎されないことはわかり切っている。

私が不在のあいだに、家族は皆安らぎと落着きを取り戻したことだろう。私が欠けたことによ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com